

入学初日の授業は、訓練所で行われたテストだけで終わりだった。

そして教室に戻り、担任であるエミリアから締め挨拶を聞いて解散だ。

「えー、今日は入学初日ということもあり……皆さん疲れているでしょうから、真っ直ぐ寮に帰って休んでください。特に午後は疲れましたね……先生も疲れました。では解散」

どう見ても一番疲れているのはエミリアだった。頬がげっそりしている。

「あー……そうだローラさん。あなたの荷物、保健室に起きっぱなしだから。寮に運んでおいてね。それじゃあ……」

エミリアはそう言って、教室から出ていった。

それから生徒たちも立ち上がり、わいわい騒ぎながら教室を出たり、残って雑談したりしている。

ローラはその輪に入ることができない。

どうやら午前中のうちに、ある程度グループが出来上がってしまったらしい。

とはいえ、ローラが無視されているというわけではなく、皆、こちらにチラチラと視線を向けてくる。

しかし、話しかけては来ない。

興味が半分。恐怖も半分。

(訓練場で、やらかしすぎた……?)

魔法使いのことをほとんど知らないローラでも、自分の力が他の生徒と違うというのは理解した。

「ローラさん、ローラさん。あなた午前中寝ていたから、女子寮の場所を知らないでしょう?」

ローラがボンヤリしていると、不意に話しかけられた。視界の端に映ったのは、黄金の螺旋。

シャーロット・ガザードだ。

「あ、はい……でも誰かに聞けば……」

「わたくしが案内しますわ」

「へ?」

それは意外すぎる一言だった。

てっきりシャーロットには嫌われているものと思っていたのだが。

「何を呆けていますの? わたくしとあなたは同室。今から部屋に行くので、あなたはついてきな

よこ」

なるほど。そういう理由か。

しかし、無視されなかっただけでも嬉しい。

ローラはついつい頬を緩めてしまう。

「な、何をやけていますの……?」

「何でもありません。それより、保健室に荷物を取りに行っていていいですか?」

「ええ。わたくしがその程度も待てない狭量な人間だと思いで?」

「シャーロットさん、優しい人なんですわね!」

「え、このくらいで!」

そしてローラはシャーロットと一緒に保健室に行き、荷物を回収してから寮に向かった。

その間、ほとんど会話はなかったが、クラスメイトと並んで歩くというだけでローラは楽しかった。どうしてこんなに楽しいのか、自分でも最初は分からなかった。

だが、よく考えてみれば、小さい頃から（今も小さい）ずっと剣の修行ばかりで、年の近い人と遊んだ覚えがほとんどなかった。

つくづく父親の教育は偏っていたのだなと思ひ知る。

その偏りもまた楽しかったのだが……ここで一つ、まともな学園生活を送ってみよう。

「ここが私たちの部屋ですわ」

「ありがとうございます。おお、結構広いですね」

ベッド。タンス。机。それぞれ二つずつ。

暮らしていくのに最低限のものが用意されていた。

ランタンも一つだけあるが、魔法学科の生徒は自分の魔力で明かりを作れるので、これは不要である。

ローラは着替えやタオルなどが入った鞆それから愛用の剣を床に降ろし、ベッドに腰掛けた。

結構いい布団だ。ふかふかしている。これなら授業で多少疲れても、一晩眠れば元気になるだろう。

「シャーロットさん。これから卒業まで、よろしくお願いします!」

「……ええ、よろしく。けれどローラさん。一つだけハッキリさせておきますわ」

「何ですか?」

「わたくし、誰とも必要以上になれ合うつもりはありませんの。わたくしの当面の目標は、学園最強の生徒になること。つまり全員がライバル。特にローラさん。あなたは敵ですわ!」

そう言ってシャーロットはローラをビシッと指差した。

「え、敵!」

「そうですわ。さっきの訓練場での一撃。あれは何ですの。わたくしとソックリな魔法でありながら、わたくしよりも遥かに高威力。当てつけですか? 嫉妬と受け取ってくださいでも構いませんが……正直、不愉快でしたわ!」

不愉快。そう言ったシャーロットの表情には、本当に怒りが浮かんでいた。

「わ、私は……ただ……」

ただ、シャーロットの魔法が格好よかったから。

それだけの理由で真似をしたのだ。悪意なんてなかった。

しかし、シャーロットの立場になって考えれば、確かにバカにされたように感じるだろう。

ローラがやったことは、お前にできることは自分ならもっと上手にできるのだぞ、と。そう言っ

たのと同じだった。

「ごめんなさい……私、魔法のこと分からなくて。今日見た中でシャーロットさんが一番素敵だったから、つい真似しちゃって……あんな威力になるって自分でも知らなくて……シャーロットさんの気持ちも考えずに、私は……」

謝り方すら分らない。

今の言葉も、はたから聞けば自慢に聞こえるかもしれない。

どうしてこうなってしまったのだろうか。

戦士学科に入って、クラスメイトと切磋琢磨して、友達を作って、放課後は居残って剣の稽古をしたり、街に遊びに行ったり——そんな学園生活を想像していたのに。

これでは友達一人作ることすらままならない。

魔法のことも好きになりかけていたのに……。

「は、え、ちよつと、何を泣いていますの……!?」

「だって、私、シャーロットさんに酷いことを……」

「いえ、ローラさんは何も、わたくしが勝手にひがんでいるだけで……ああ、もう、これではわたくしが完全に悪役ですわ!」

シャーロットはハンカチを手に取り、ローラの涙を拭き取る。

「今のはわたくしが悪かったのです。謝ります。ごめんなさい。ですから、泣くのはおやめなさい」
「許して、くれるんですか？」

「ですから、許すも何も、悪いのはわたくしです。自分よりずっと年下の少女に本気で嫉妬するなんて、我ながら恥ずかしいですわ。負けたなら、努力していつか勝てばいいだけのことなのに……」

努力して、いつか勝つ。

当たり前すぎるほどの正論だ。

きつと、どんな世界でも、それは基本の考え方。

だが、ローラの魔法適性はオール9999なのだ。

努力でどうにかなるものなのか？

普通なら諦めるものではないのか？

「ローラさん。わたくしの攻撃魔法適性は120です。他の魔法適性も100前後。つまり、あなたの約百分の一ですわ」

つまり、追いつくのは不可能——。

「つまり、ローラさんの百倍努力すればいいだけのこと。負けませんわ。この学園で最強の魔法使いになるのは、このシャーロット・ガザードです!」

ローラはハッとして顔を上げた。

シャーロットは真っ直ぐにこちらを見ていた。

「ローラさん。あなたは良くも悪くも特別ですわ。きつと、色々なことを言われるでしょう。陰口を叩かれるでしょう。わたくしのように嫉妬をする者。面と向かって悪口を言う者もいるでしょう。」

ですが、つねに全力でいてください。他人に遠慮して手加減をしないでください。わたくしは必ず追いつきます。あなたに勝ちます。手心てしんを加えることは、他人に対する侮辱おしよと知りなさい！」

ああ、魔法の世界にも、こんなに真まことつ直ただぐな人がいるのか。まるで剣を握にぎっているときの父のような瞳ひとみだ。

ローラは、なぜシャーロットを格好いいと思ったのか、真に理解した。

彼女は疾走しつそうする光だ。

前だけを見つめて突き進む輝きらきだ。

そんな彼女が今、自分を見つめている。

何と答えればいい？

ありがとう？ よろしくお願いします？

否いな。何だ、その寝ほけた台詞せりふは。

父と母から何を学んだ。

戦士と魔法使いという違いはあれど、言うべき言葉に変わりはない。

そう。たった一つのシンプルな答え。

「私、負けませんよ！」

この瞬間、ローラとシャーロットは友達となった。

※

ローラとシャーロットは一緒に学園の食堂に行き、晩ご飯を食べた。

ローラはオムレツとサラダ。シャーロットはビーフシチューを頼んだ。

(このオムレツ……悪くはないけど、お母さんが作ったやつのほうが美味おいしいな)

一目で早くもホームシックになりそうなローラだった。

それから寮の大浴場で一日の汚れを落とし、パジャマに着替えて部屋に戻る。

「ねえねえ、シャーロットさん。どうせならベッドをくつつけましょうよ」

「……なぜですか？」

「だって、そっちのほうが楽しそうじゃないですか！」

「まあ、別に構こまいませんが、結構重おもいと思いますわよ」

「大丈夫です！ 私、もともと戦士学科に入る予定でしたから。よいしょ！」

ローラは一人で軽々とベッドを持ち上げ、もう一つのベッドに隣接させた。

「……小さいのに大したものですね」

「えへへ、お父さんとお母さん譲ゆづりの腕力うでぢからです」

そして二人でベッドに寝そべる。

せっかくベッドをくつつけたのだから、本人同士もくつつかなければ損だろうという理屈で、ローラはシャーロットの隣までコロコロと転がっていく。

「あ、暑苦あつしいですわ！」

ドンッと跳ね返されてしまった。
残念である。

「シャーロットさん。寝る前にちょっとお話ししましょうよ。ここに来る前の話とか。卒業したら何したいかとか」

「早く寝たほうがいいのでは？ 明日も授業があるのですから」

「ちょっとだけです。私、シャーロットさんのこと、もっと知りたいです！」

「……あまり長くは付き合いませんわよ？」

「はい！」

まったく、困った娘と同室になってしまった、とシャーロットは苦笑した。

シャーロットのことが知りたいなんて言っておきながら、一方的に自分語り。

父がどんなに強い剣士であるか、とか。母の作ったオムレットがもの凄く美味しい、とか。故郷の町の近くに綺麗な湖があって、よく釣りをしていた、とか。学園に辿り着く前に王都で迷子になりかけた、とか。

散々語ってから、先に眠ってしまった。

「わたくしは何も話していませんのに」

その寝顔は年相応に子供っぽくて、とても可愛らしくて、見ていただけで微笑んでしまう。

しかし、この子は怪物だ。

訓練場で見せたあのバカげた威力の魔法。

おそらく、あれは限界ではない。

あんなものでは済まない。魔力を絞り出していない。

そして、まだまだ成長する。

自分はこの子に本当に勝てるのか？

威勢のいいことを言ってしまったが、自分でも信じているのか？

適性値9999。

その真価をまだ誰も目撃していない。

いや、それでも。

相手が誰であろうと勝ってみせる。

そう決めて入学したのだ。

ならば単純。自分でも言ったとおりだ。

ローラの足を引っ張ったりはしない。その上でローラの百倍努力し、越える。

勝つとはそういうことだ。

「にしても……眠れませんか」

隣でスヤスヤ熟睡しているローラが羨ましい。

よく新しい環境ですぐに眠れるものだと感心してしまう。

しかも、この子は午前中ずっと眠っていたはずなのだ。

熟睡適性というものがあつたとしたら、それも9999なのだろう。

「布団が違う。枕も違う。そして何よりも……」

実家でいつも抱いていたぬいぐるみがない。

シャーロットはあれがないと眠れないのだ。

とはいえ、もう十四歳。

いつまでもぬいぐるみを抱いて寝るのはみっともない。

まして学園の寮は二人部屋。

これを機会にぬいぐるみから卒業しようと考え、実家に置いてきたのだが。

眠れない。

疲れているのに眠れないという理不尽な状態に置かれている。

「……もうこうなったら、奥の手を使うしかありませんわ」

シャーロットはローラを見る。

この九歳の少女。大きさがあのぬいぐるみと同じなのだ。

さつき大浴場に入ったときからずっと思っているのだが、とても抱き心地がよさそうだ。

ああ、もう我慢できない。

そっと抱いて、そしてローラが起きる前にこちらが起きれば、きっとバレない。

問題ない。

「ローラさん……失礼しますわ……!」

意を決して抱きしめる。

その瞬間、至福の感触を全身で感じ取った。

あのぬいぐるみと同等。いやそれ以上の心地よさ。

匂いもいい。風呂上がりだからか？ それともローラ自体がこの香りを放っているのか？

いずれにしても、これは素晴らしい。

楽園だ。

(昇天しそうですわ!)

こうしてシャーロットは何とか安眠することができた。

そして次の日の朝。

「わ、私どうしてシャーロットさんに抱きつかれてるの!? 何があつたの!? シャーロットさん起

きて! 私、動けません!」

「すやあ……」

「うう……何だかとても幸せそうな寝顔です。まだちょっと早いし、二度寝しようかな……」

そのまま寝坊し、仲良く朝礼に遅刻し、エミリアに叱られてしまう二人であった。

魔法学科の授業は、座学六割、実技四割だった。

まだ入学したばかりなので、まずはしっかりした知識をつけさせるという方針らしい。

座学では世界史。今現在の世界情勢。モンスターの分布。その対処法。魔法の歴史、理論などを学んでいる。正体不明の古代文明に関する小ネタなんかも教えてもらった。

それから実技。これはローラにとってアクビが出るものだった。

エミリアが放った弱々しい攻撃魔法を防御魔法で防ぐとか、魔力の放出を一時間続けて持久力をつけるとか、遠く離れた目標を撃ち抜く訓練とか、とにかく退屈だ。

どれもこれも容易い内容である。

しかしクラスメイトにとつては難しらしく、ローラとシャーロット以外は苦戦していた。

そのことをシャーロットに愚痴ると、意外と常識的な意見が返ってきた。

「授業の進みが遅いのは仕方がないですわ。いくらこの学園が落ちこぼれを容赦なく切り捨てるからといって、適性値100の人間に合わせるわけにはいきません。基準は50。それですら一般的には優秀といわれる部類なのです。まあ、もどかしいというのは同意しますが、いずれ授業のレベルは上がります。それまでは放課後に自主練するのがよろしいでしょう。わたくしは既にそうしていますし」

そう、それもローラの不満の原因だった。

入学してから今日で四日目。

一緒に寮に帰ったのは初日だけで、あとは別々だ。

シャーロットが図書館にこもったり、先輩に果たし状を送りつけて訓練場で決闘したりしているからである。

この学園。決闘は校則違反どころか、むしろ推奨されているらしい。

生徒の向上心を促すとかいう理由で、教師の立ち会いさえあれば、訓練場や闘技場で生徒同士が戦うことができる。

また教師も教師で、生徒同士の決闘を見るのが趣味という困り者が多く、立会人が不足するといふこともない。

今のところローラには、図書館にこもって勉強するほどの向上心はない。シャーロットには「負けない」と言ったが、授業だけで脳が疲れてしまい、放課後まで座学をやる気になれなかった。

もちろん、先輩に果たし状を送りつけるというのは論外だ。

自主練も何をやっていいのか分からない。

そもそも練習とか訓練と呼ばれるものは、達成目標があるからやるのであって、自分より強い魔法使いを知らないローラにとって、目標など立てようもなかった。

教師であるエミリアが本気を出せば、あるいはローラより強いのかも知れない。

しかし、しばらくエミリアの本気を見る機会はないだろう。

ゆえにローラは放課後を持て余していた。

なにせシャーロット以外に友達がいなのだ。

クラスメイトに話しかけて友達を増やせばいいのだが、全員年上なので気後れしてしまう。しかも何を話していいのかも分からない。

剣の話ならいくらでもできるのだが……。

ゆえにローラは時間を持って余し、自室で剣を布でピカピカに磨き上げる毎日を過ごしていた。しかし、ふと思いつく。

（あ、そうだ。戦士学科でも居残りしてる人がいるかも。特に剣の適性値が98だったアンナさん。あの人も授業が退屈で、自主練していると思う！）

見に行こう。あわよくば混ぜてもらおう。

そして、そして。友達になってもらおう。

（善は急げ！）

剣を鞘に収めベルトで縛って腰に固定する。

そして戦士学科の訓練場を目指した。

ギルドレア冒険者学園は、校舎と寮こそ戦士学科と魔法学科で共通だが、訓練場は別だった。

戦士と魔法使いではやるべき訓練がまるで違うし、それに訓練場が一つだけでは足りないという理由もある。

戦士学科の訓練場が近づくにつれ、カーンカーンと金属がぶつかる音が聞こえてきた。

そして中は、熱気に包まれていた。

剣と槍で模擬戦を行っている生徒がいる。

素振りをしている生徒もいる。

弓矢の練習をしている生徒もいた。

鏡の前で型を確かめている生徒。筋トレをしている生徒。瞑想している生徒。

（これ、これよ！）

ローラはたまらず身震いした。

今まで自分と父だけで稽古していたのに、こんなに沢山の人が剣を振っているなんて。

剣士だけでなく、槍士も斧士も弓士も格闘家も、全員が親戚に見えてしまう。

そんな親戚たちを見回し、ローラは目当ての者を探した。

「あ、いた！」

訓練場の端で、一心不乱に剣を振り下ろす、赤い髪の少女。

ゾクリと毛穴が逆立つほどの集中力で自分の世界に入っている。

しかもバカげた大きさの剣だ。

刃渡りはローラの身長よりも長く、幅と厚みは辞書並み。

そんな鉄塊の如き剣で、幼い少女が素振りをしている。

冗談のような光景だが、それこそローラがギルドレア冒険者学園に求めていたものだった。

「アンナさん！」

ローラは彼女に駆け寄って名前を呼んだ。



その刹那^{せつな}。

アンナの剣の軌道が変化し、ローラの首元を狙^{ねら}って走った。それに対してローラは瞬時に反応。腰から剣を抜いて受け止める。

訓練場全体に、甲高い金属音が響き渡った。

腕がビリビリと震える。

防御していなかったら、間違いなく首が飛んでいた。

「あ」

アンナは自分がしでかしたことに気付いたようで、剣を降ろし、目を泳がせる。

「ごめん……いきなり走ってきたから」

「ううん。私こそごめんなさい。ちゃんと防御できたから大丈夫です。それより、凄^{すご}い剣ですね！

そして、それを扱うアンナさんも！ 私がそんなに大きな剣を使ったら、きっと逆に振り回されちゃいます」

「あ、ありがとう……」

アンナは照れくさそうに頭をポリポリかいた。

素直な反応だ。やはり友達になれそう、とローラは安心する。

「あの、アンナさん。私とちょっと模擬戦やってみませんか？」

「それは、願^{ねが}ってもないこと。私もあなたに興味があった。けど、あなたは魔法学科に転籍^{てんせき}になっ
たはず……」

「そうですね。やっぱり剣は好きですから。我慢できずにここに来ちゃいました！」
そうだ。我慢ができない。
とにかく剣を振り回したい。

最悪、一人で素振りを続けるという手もあるが、どうせなら相手が出たほうが、楽しい。

「……分かった。相手したげる」

「ありがとうございます！」

と、両者の間で合意がなされた瞬間。

「ちょっと待った！」

思わぬところから横槍が入った。

それはまさに槍を持った男だった。

年齢は四十代半ばくらい。ローラの両親より年上だろう。

制服を着ていないので、教師だと思われる。

「なに、先生。模擬戦をしちゃ駄目？」

アンナは恨めしそうに呟いた。

「模擬戦自体は駄目じゃないが……相手が悪い。こいつは魔法適性オール9999のローラ・エドモンズじゃねーか。ここにいること自体が問題だ。もしここで体力を使い果たして、明日の授業に差し支えたら、俺が魔法学科の教師から文句を言われる」

「でも、戦士学科と魔法学科の共同訓練は、むしろ推奨されてるって授業で習った」

「相手が普通の奴ならな。それに一年で共同訓練やる奴なんてほとんどいない。まずは自分の専門分野の基礎を固めろ。二年になってからでも遅くはない。というわけでローラ。お前は帰れ！」

その教師はハエでも払うかのように、手の平をヒラヒラさせる。

せっかく念願のアンナと話せて、更に模擬戦をこれから一発かますところだったのに。

それを邪魔され、ローラは頭に血が上りそうだった。

「お、横暴です！ 戦士学科に入ったかかったのに勝手に魔法学科にされて……それでも我慢して授業を受けて、せめて放課後くらいはと思つてここに来たのに、それすら駄目だつていうんですか!? 私は、剣が好きなんです！ 才能だつてあるはずですよ。だつてお父さんの娘ですから。お願いします。放課後だけでいいから、ここにいさせてください！」

ローラは教師にしがみつき、必死に訴えた。

これほど一生懸命、誰かに何かを懇願したのは初めてかもしれないというほどに。

「そりゃ……お前さんの剣の適性は107だからな。間違はなく天才だ。しかし、ただの天才だ。それに比べて魔法適性オール9999つてのは前代未聞なんだよ。かの大賢者様だつて30000、60000らしいからな。そもそも、あの装置で測定できる限界が9999つてだけで、お前さんの適性値はもっと上かもしれないんだ。正直、俺だつてお前を鍛えてみたい。どこまで伸びるか楽しみだ。しかし……お前が魔法を学ばないのは人類の損失なんだ。だから……諦めよう、お互い！」

「そんな……それでも私は剣の修行がしたいです！」

そう叫んでから、ローラはわんわん大声を出して泣いてしまった。

恥も外聞もなく泣きじゃくった。

魔法が嫌いなわけじゃない。シャーロットのおかげで好きになれそうだし。しかし、それとこれは別問題。

剣を捨てるなんて不可能だ。

ローラの目標は父のような、いや父を超える剣士になること。

それを諦めるなんて、残酷にもほどがある。

「あの……前を通りかかったらローラさんの泣き声が聞こえたんだけど、何があったの？」

と、そこにローラの担任であるエミリアがやってきた。

「おお、エミリア。丁度いいところに来た。ご覧の通りだ。ローラがうちの生徒に剣で模擬戦を挑んでな。止めたら泣き出したんだ。この子の気持ちも分かるが……あとは任せた！」

「ああ、そういうこと。さ、ローラさん。帰りましょ。練習がしたいなら、私がいくらでも付き合ってあげるから」

「嫌です嫌です！ 私は剣がいいんです！ 魔法の練習は授業中にしてるじゃないですか！」

「あら。魔法は奥が深いのよ。いくら練習したって終わりってことはないの」

「でも、自分より弱い人に教わることなんてありません！ 先生、私より弱いじゃないですか！」

ローラは本音をぶちまけた。

普段なら思っていると言わないことだが、今はもう、エミリアが自分の邪魔をする敵にしか見えなかったのだ。

その瞬間、ピキッと何かが千切れるような音がした。

そしてエミリアのこめかみがピクピク痙攣し、青筋が浮かんでいた。

「弱い……？ この私が……ドラゴンを単騎で倒し、大賢者様に「竜殺し」の二つ名を授かったこの私が……こないだ入学したばかりのちびっ子より弱い？ はっ！ 適性値9999だからって調子に乗りすぎよローラさん！」

「ドラゴンを倒したからって何ですか！ 私のお父さんとお母さんは、一対三でも余裕だって言うてましたよ！」

「くっ……あなたの両親は関係ないでしょ！ 今はローラさんの話をしてるの！」

エミリアは本気で怒っているようだ。

しかしローラも引くわけにはいかない。

剣を否定されるということは、人生を否定されたのと同じなのだ。

適性値なんて糞喰らえだ。

放課後に好きなことをやって何が悪い。

「お、おいエミリア……子供相手に大人げないぞ」

槍を持った男性教師がエミリアをたしなめようとした。

「先輩は黙っててください！」

が、一蹴されてしまう。怒ったエミリアはとても怖い。

「……ローラさん。そこまで言うなら、私と戦いましょう。明日、午前の授業で。クラスの皆の前

で。そろそろ魔法合戦がどういうものか見せる頃合いだと思っていたところです。あなたを教材にしてあげましょう！」

「望むところです！ 私が勝ったら、放課後に剣の練習をすることを認めてくれますね!？」
「もちろんです。その代わり、先生が勝ったら、ローラさんは卒業まで魔法一筋ですからね。いいですね！」

「いいですよ。だって私が勝ちますから」

「その自信、へし折ってあげるわ！ それが教師としての役目です！」

エミリアは顔を真っ赤にして踵を返し、肩を怒らせて訓練場から出て行った。

ローラもまた鼻息を荒くし、エミリアの背中を睨み付け、あかんべーをする。

「……エミリア、大人げねえにもほどがある……ドン引きだわ」

男性教師は呆れた声を出していた。

対して、周りで聞いていた生徒たちは、目を輝かせていた。

教師VS生徒。

それも美人教師と適性値9999の新入生というカード。

注目を集めるに決まっている。

「先生！ 明日の午前の授業は、魔法学科の授業を見学しませんか!? たまには他の分野を見るのも勉強になると思います！」

「賛成！ ちなみに俺はローラちゃんが勝つ方に賭けます！」

「じゃあ俺はエミリア先生に。俺、あの先生のファンなんだよ」

「ああ、眼鏡がいいよな」

「何の話だよ」

そんなアホなノリが場を包み、そして槍使いの男性教師まで「うーん」と唸り、悩み始めた。どうやら彼も興味があるようだ。

それからアンナが、ローラの制服をクイクイと引っ張り始める。

「……あなたは勝たなきゃ駄目。私、あなたと一緒に剣の練習がしたい。だから……」

アンナは大きな瞳で見つめてきた。

まるでリスみたいな印象を受ける。

だが、その奥底で闘志がメラメラと燃えているのがよく分かる。

彼女もまた、好敵手を探していたのだ。

ならば、応えねばならない。

ローラとてアンナと戦いたいのだ。技を磨き合いたいのだ。

「大丈夫です。私、魔法が得意らしいですから。必ず勝ちます。そして、その次にアンナさんにも勝ちますよ」

「……それは楽しみ」

ローラが不敵に笑うと、アンナもうつつすらと笑みを浮かべた。

一番強いのは私。互いがそう思っているのだ。

そうでなければ上を目指すなど、とてもとても。

※

「ところでローラさん。あなたバカではありませんの？」

「え、唐突になんですか!？」

夜。自室でくつろいでいたローラは、シャーロットに突然、バカ呼ばわりされてしまった。何の前振りもないし、心当たりもなかったので、怒るよりも先にボカンとしてしまう。

そんなローラの顔が気に入らなかつたらしく、シャーロットはますます眉まゆを吊り上げ、そして頬をムニツとつねってきた。

「いた、痛いですよシャーロットさん！」

「当然の報いですわ！」

彼女は本当に立腹しているらしい。

だが、ローラには何のことやら分からないので、謝ることもできない。

「その顔はピンときていない顔ですわね。あなた今日、戦士学科の訓練所に行ったあげく、エミリア先生にケンカを売ったというではありませんか！」

「……ああ、そのことですか」

「ああ、じゃありませんわ！ わたくしですら戦士学科に殴り込んだりしていませんのに。わたくし

ですら教師にはまだ果たし状を送っていませんのに！」

「いや、別に殴り込んだわけじゃないですし。果たし状も送ってないですよ」

戦士学科の訓練場には、遊びに行くような感覚でお邪魔しただけ。エミリア先生との一件は、流れでああったのだ。

シャーロットのように、学園でトップをとってやろうという野心からの行動では断じてない。

「まったく……こんな大人しい顔をしておきながら、やることは派手ですわね！」

シャーロットはローラの両頬をグイグイと引っ張ってくる。

「痛いですが、やめてくださあい！」

「やめませんわ、おしおきですわ！」

「ふええ……」

「な、なんて柔らかいほっぺ……病みつきになってしまいますわ！」

「シャーロットさん、目的が変わってますよう」

それから数分後。ローラのほっぺはようやく解放された。

触ってみると、少し伸びてしまったような気がする。

イジメじゃないのか、これは。

「もう、シャーロットさん、酷いです！」

「ローラさんがお可愛らしい顔で誘惑するのがいけないのですわ！」

「そんなことをした覚えはありません！」

ローラの顔はずっとこれだ。

顔が頬を引つ張る正当な理由になるというなら、ローラは四六時中誰かに引つ張られることになる。きつと頬が地面まで垂れ下がってしまうだろう。

「まあ、ほっぺの件はともかく……大丈夫ですか？ エミリア先生はお若いですが、Aランク冒険者。間違いない超一流。才能だけではどうしようもない経験の壁がありますわ。あなた、負けたら卒業まで剣を使っただけじゃないという条件を出されたのでしょうか？ いいのですか？ 今からでも謝れば許してくれるのでは？」

そう言われ、ローラは目が点になった。

シャーロット・ガザードともあるう人が、なんて腑抜けたことを考えているのだろうか。

「シャーロットさんが私の立場だったとして、負けるのが怖いから先にごめんなさいしますか？」
今度はシャーロットが「うっ」と唸る。

そう。

これはローラとシャーロットのような人間にとって、当たり前の話。

上を目指す。強くなりたい。それを実現する手段は多々あれど、二人とも不器用だ。

この数日、語り合っただけでよく分かる。

似た者同士。

迂回が下手くそ。猪突猛進しか知らない。立ち止まって考えるくらいなら体当たりをくり返す。
非効率的なように思えて、これが一番の近道だ。

この生き方をやめた途端、どうしていいか分からなくなってしまうだろうから。

「……確かに、妄言でしたわね。では、話題を変えましょう。どうやって勝つおつもりで？ わたくしたちはエミリア先生の手の内をほとんど知りませんわ。戦術の立てようもない。やれることは唯一つ。今自分にできるあらゆる技を叩き込む。つまり、力の真つ向勝負。いくらローラさんが適性値オール9999だとしても、Aランク相手に分が悪いとしか言いようがありませんわ。なのに、あなたの顔を見ると……負ける可能性を考慮していないように見えるのですが……」

「まさか。私だって流石にそこまで思い上がりません。相手は先生。負けるかもしれないとは思っています」

正確に言うと、訓練場で口喧嘩をしたときは、自信満々だった。

しかし、あとになって冷静になると、無謀だと認めざるを得ない。

とはいえ、もう一度同じ状況になっても、やはり同じことをするだろう。

なにせ、エミリアに勝てば、放課後に剣の練習ができるのだから。

「戦って勝つ。たったそれだけで私は望むものが手に入ります。分かりやすい。実にシンプル。しかも負けたからって死ぬわけじゃない。卒業まで魔法に専念すればいいだけです。逃げる理由がどこにありますか。三年は長いですが、私はもう我慢できないんです。明日、エミリア先生を倒して放課後の自由を勝ち取ります。それ以外のことは考えていません」

「なるほど。ローラさん。あなた、本当にわたくしと考え方が似ていますのね。それにしても……」

と、シャーロットは一度言葉を切り、ため息を吐いて苦笑する。

「こうして他人の口から聞くと、なんてバカバカしい考え方だろうかと思知らされますわ」

「ば、バカじゃないですよ！」

ローラは真面目にやっているのに。

どうして日に何度もバカ呼ばわりされてしまうのか。

まるで解せない。

「と、ところでローラさん……恥を忍んでお願いがあるのですが……」

「何ですかシャーロットさん。私にできることなら何でもしますよ」

明かりを消して暗くなった部屋。

お互いベッドに潜り込んで、さあ眠ろうという矢先。

シャーロットが歯切れの悪い口調で『お願い』なんて言い始めた。

ローラの知る限り、シャーロットはいつもハキハキしている。そんな彼女がオドオドしているのだから、きつと余程のことに違いない。

ローラは重いまぶたに鞭打って、彼女のお願いを聞く。

「あの、実はですね。わたくし昔から、寝るときにいつもぬいぐるみを抱いていまして……それがないと眠れなくて……そしてローラさんは、そのぬいぐるみと丁度同じ大きさなのです。ですか

ら……」

「ああ！ それで毎日、目を覚ますとシャーロットさんが私に抱きついてたんですね！ 何かと

思いましたよ」

「はい……それで今日も……」

「いいですよ。むしろ嬉しいです。わーい、シャーロットさんに抱っこしてもらえます！」

ローラは母親にくっついて寝ていた昔を思いだしながら、コロコロ転がってシャーロットにびったりと寄り添った。

「さあ、どうぞ！ 私を好きにしてください！」

「で、では遠慮なく抱きしめさせてもらいますわ……！」

シャーロットは腕を回し、ローラをムギユツと自分の胸に押しつけた。

柔らかくて、温かい。

それはローラにとっても気持ちのいいことだった。

が、シャーロットの恍惚っぷりには敵わない。

「はふうう……なんて素敵な抱き心地……ローラさん、抱き枕適性9999ですわあ」

「えへへ、ありがとうございます」

「ローラさん、卒業するまで成長してはいけませんわ。この大きさが至高なのですから」

「はい……って嫌ですよ！ 私、ちゃんと大きくなりたいです！」

「駄目ですわ！」

「嫌です！」

「駄目！」

「嫌！」

そんなことを言い合いながら、数分後。

「……すやあ」

「……ふにゆ」

抱きしめ合いながら、仲良く眠ってしまった二人であった。

第三章

先生にも意地がある

エミリア・アクランドは自分が優秀だという自負があった。

そもそも自分に自信がない者は教師になつてはいけないと思っている。

生徒に対して失礼だろう。

そんなエミリアが冒険者を志したのは十四歳のとき。

故郷の村を襲ったオークとゴブリンの群れを、たまたま通りかかった大賢者によって救われたのだ。生きる伝説カルロツテ・ギルドレア。

風になびく白銀の髪が美しかった。後ろ姿が雄々しかった。オークとゴブリンを薙ぎ払った一撃が眩しかった。

そして「もう大丈夫だから」と手を伸ばしてくれたときの微笑みが女神に見えた。

その次の年、エミリアは王立ギルドレア冒険者学園に入学した。

三年後、首席で卒業し、Cランク冒険者となった。

そこからは破竹の勢いで昇進し、たった二年でBランクまで上り詰める。

更にその一ヶ月後。

王都の近くに飛来したドラゴンを真っ先に感知し、単身で撃破した。

これによりAランクとなった。そのとき二十歳。

現存するAランク冒険者としては最年少だった。

そして憧れの大賢者から、童殺しの二つ名を授かり、学園の教師として誘われた。現在、二十三歳。

今でも自分が優秀だと疑いなく信じている。

教師としても今までは上手くやっていた。

だが、今年の新入生はおかしい。

エミリアの魔法適性は80〜90。同期では随一の才能だった。

ところが今年は得意分野で80オーバーは珍しくない。90超えもいる。

シャーロット・ガザードなど、攻撃魔法適性120。天才の中の天才だ。

そして極めつけは、ローラ・エドモンズ。

魔法適性値オール9999。

もはや笑ってしまうようなデタラメな数値。

教師全員が、ローラの才能を前に浮ついていた。

是が非でも魔法学科に入れなければと躍起になった。

ある種のパニック状態だ。なにせ大賢者よりも才能があるのだから。

そしてエミリアは、魔法適性値オール99999の少女の担任になることを喜んでいて。

どう成長するのか楽しみにしていた。

単純に、並の天才の百倍の速度で成長する。卒業する頃には自分よりも強くなっているかもしれない——そんな生ぬるい認識をしていた。

甘かった。

入学初日であの馬鹿げた威力の魔法を放ち、あやうく新入生が皆殺しになるところだった。

そしてエミリアは生徒たちを守りきれなかった。

エミリアが構築した防御境界は、崩壊する寸前だった。

しかし、術式にローラが割り込み、魔力を流し込んで増強してくれた。

おかげで全員が無傷。何事もなく終わった。

「入学初日の九歳の女の子が、私の術式に割り込んで、あまつさえ増強してくれた……まったく、何てことかしら。私にだってプライドくらいあるのに」

悪気があつてのことではない。

むしろ大惨事を防いでくれてありがとうと言っべき。

だが、そう素直になれないのが、自分の未熟なところ。

嫉妬が先立つ。

今までの努力を尽く否定されたような気分になる。

自分が何年もかけて歩んできた道が、あの子にとつての第一歩なのだと思いつけられたのだ。

「その小さなプライドを守るため、生徒にケンカを売ってしまった……本当、何をしているのかしら、私」

本当なら放課後くらい、剣の稽古をさせてやってもいいのだ。

むしろ新入生たちがもう少し学校に慣れたら、エミリアのほうから言い出そうかとすら思っていた。だどいうのにエミリアは「自分より弱い人に教わることなんてありません」という言葉でキレてしまった。

子供相手に、本気で。

教師失格。大人失格。

そこまで自覚しておきながら、エミリアは明日、ローラと決闘する。その予定に変更はない。なにせこっちは冒険者なのだ。

冒険者に、まともな大人がいるわけがないじゃないか。

自分より強い奴を見つけたら挑むしかない。

そうでなくては冒険者とは言えない。

現にこの教師の大半は、大賢者に挑んで敗北した経験を持っている。

「大人げない」

そう言ってくる同僚がいた。しかし顔には「うらやましい」と書いてあった。

「お前が負けたら次は俺だからな」

そう正直に言ってくる教師もいた。

実に実に、度しがたい集団だ。

普段は大人ぶって生徒に偉そうなことを言っているくせに。精神年齢は十代の頃から変わって

ない。

戦いたくて戦いたくてウズウズしている。

ローラ・エドモンズという才能の塊かたまりを前にして、あれは自分とは違う生物だからと無視を決め

込めるのは、まともな証あかし。大人の思考だ。

エミリア・アクランドは二十三歳だ。半年もすれば二十四歳になる。

だが明日、全身全霊をもってして、あの超天才を迎え撃つ。

勝敗にかかわらずローラに放課後の自由を認めるつもりでいるから、これはもう、個人的な戦いだ。無論、やるからには勝つつもりで。

※

ギルドレア冒険者学園には闘技場がある。

建てられた理由は、年に一回行われる生徒同士のトーナメントだが、普段の授業で使うこともある。今日は、魔法学科一年生の授業に使うという名目で、エミリア・アクランドの名で押さえられる。

授業の内容は、魔法合戦の手本を生徒たちに見せること。

本来、そういった授業は教師同士で実演してみせるものだが、今回は新入生のローラ・エドモン

ズが相手に選ばれた。

なぜか、と問う者はいない。

エミリアが他の教師に協力を頼むと、誰もが快く引き受けてくれた。

瀕死の重傷を負っても大丈夫なように、回復魔法のスペシャリストを待機させる。

闘技場の客席に被害が出ないよう、防御魔法が得意な教師を十人も配置させた。

この布陣だけで、今日ここで行われる戦いがどれだけの火力戦になるか、想像できるというも
のだ。

「あいつ生徒相手に本気で戦う気だな」

「むしろ殺る気なんじゃねーのか？」

呆れたような、感心したような。そんな同僚の声が聞こえてくる。

あながち間違いではない。

無論、本当に殺すつもりはないが、そのくらいの気持ちでやらないと、こちらが秒殺される。

「先生。今日だけはライバルですね！」

闘技場の上に立つローラは、剣を持っていなかった。

エミリアが剣を持参してもいいと伝えたのに、今日は魔法合戦なのだから剣はルール違反だと
ローラから拒否した。

それにしても、何て無邪気な表情だろうか。

エミリアは安心した。

萎縮していたらどうしようかと思っていたのに、彼女は今日の戦いを楽しもうとしている。

間違いなく、こちら側の人間だ。

ならば遠慮は無用。

「今日だけじゃないわ。冒険者は全員、ライバルだから」

「そうですね。父と母もそう言っていました！ 負けませんよ！」

「言ってくれるじゃない。才能だけで勝てるほど魔法の世界が甘くないって、教えてあげるわ」
客席にいるのは自分の生徒たちだけではない。

他の学年からも、戦士学科から見学者が来ている。

これで負けたら、もうエミリアは教師としてやっていけない。

生徒より弱い教師などナンセンスだから。

「じゃあ、始めましょう。どこからでも、かかってきなさい」

それが試合開始の合図。

まずはローラからの攻撃。

そんなハンデをくれてやる余裕はないのだが、教師としてギリギリの矜持だ。

この一線を越えたら、勝っても勝った気になれないだろう。

「では、遠慮せず！」

刹那、ローラは走った。

フェイントも入れず、真っ直ぐこちらに向かって突進してくる。

まるで猫科のモンスター『ホーンライガー』のような加速。

筋力強化の魔法を使っているのかと思ったが、魔力の流れを感じない。おそらく自前の脚力だ。そういえば彼女はエドモンズ夫妻の娘だった。

魔法の才能のせいで影が薄いのが、戦士としても十二分に天才。

身体能力だけでも警戒に値する。

そしてローラは走りながら、拳に魔力を込め始めた。

直接叩きつけるつもりだろうか。

発想が魔法使いのそれではない。魔力の使い方がなっちゃいない。

しかし、それなのに冷や汗が出るくらいの魔力が拳に詰まっている。

殴られたら、確実に死ぬ。

(まあ、当たったらの話なんだけどね)

エミリアは余裕を持って反撃に転じた。

まずはローラの進撃を止める。

無詠唱で土の精霊に干渉。闘技場の地面を隆起させる。

「にゃっ！」

ローラの経歴から考えて、魔法使いと戦うのは初めてのはず。

入学初日の一件のように、立ち止まって落ち着いた状態なら、相手の術式を見破ったり干渉したりもできるだろう。しかし、戦いながらは流石に無理のようだ。

足元が突然盛り上がるという現象に対処できず、ローラはそのまま空高く跳ね上げられた。すかさず追撃。

「母なる大地よ。吹き抜ける風よ。我が魔力を捧げる。ゆえにその身を牙となして、我が敵を貫け」

隆起した土はそのまま伸びて、鋭く尖り、巨大なランスのようになる。

そして風の精霊の力により、垂直に発射。

狙いはもちろんローラである。

攻撃は更にもう一発。

今度は空の彼方から。

「空駆ける雷よ。我が魔力を捧げる。ゆえに天より破壊を落とせ。立ちふさがる障害を焼き払え」

雲一つない快晴だ。天候が荒れる気配はない。

だというのに突如として落雷が轟音とともに降りそそぐ。

そこに真つ当な理屈は存在しない。

エミリアが自分の魔力を精霊に捧げ、世の理をねじ曲げてもらったのだ。

魔法とはそういうもの。

火がないところに煙を立たせたい。砂漠に雨を降らせたい。平地に山を作りたい。空を飛びたい、

長生きしたい、全てを知りたい。

魔法使いほどワガママな人種はいない。

だからこうして九歳の少女に本気の攻撃が可能なのだ。

この土のランスと晴天の落雷の組み合わせは、かつて空飛ぶドラゴンを屠ったもの。

三年経ってエミリアの魔力はあのとときより強くなった。

つまりローラは、ドラゴンですら死ぬような攻撃に晒されている。

本来なら跡形も残らない。

エミリアは幼い子供を殺した罪人になってしまふ。

だが、そうはならないと、信頼シノノしている。

(ほら、やっぱりね)

ローラはエミリアの信頼シノノに応えた。

地上から迫るランスと、天から落ちる雷に同時に挟まれながら、人ならざる魔力で防御結界を形成。

完璧カンペキにこちらの攻撃を防ぎきる。

(けどこれは……！)

完璧、すぎる。信頼を上回った。

まさか無傷でしのでしなうとは。

これだから天才は困るのだ。

(そうよ。私は凡人なの。あなたに会うまで天狗てんぐになっていた。気付かせてくれてありがとう。けれど今日勝つのは私よ)

れど今日勝つのは私よ)

エミリアの手札はまだまだ健在。

入学した十五歳のときから今まで培つちかった全てを出し切ってやる。

そう思った瞬間。

動いたのはローラだった。

「先生。今の魔法、真似まねさせていただきます！」

再びの落雷。

ただし狙いはローラではなくエミリアである。

「チッ！」

信じられない。見ただけで覚えられてしまった。

しかも無詠唱。威力はエミリアより一回り上だった。

(自分の技で負けてたまるもんですか！)

全力で防御結界を張り巡らし、落雷を防ぐ。

魔力がゴリゴリ削られているが、ここで出し惜しみを考えたならその瞬間に勝負が決まる。

「いでよ雷の精霊。我が魔力を吸い上げ顕現けんげんせよ！」

自分に落ちてきた雷に向かって呪文じゅもんを唱える。

エミリアの魔力が広がり、雷を司つかさどる精霊に流れ込む。

その結果、エミリアを攻撃するために落ちてきた雷が、人の形になって地面に降り立った。

しかもその数、二十体。

「形勢逆転よローラさん。あなたはそこから地面に向かって落ちるだけ。けれど精霊は空を飛べるわ。一方的に攻撃し放題。安心して。怪我けがしても治してあげるから」

思ったよりも楽に片がついた。

いくらか戸惑うこともあったが、しよせんは魔法の初心者。魔力と才能が膨大でも、使い方を知らなければこんなものだ。

と、エミリアが安心していると。

「いでよ雷の精霊。我が魔力をくれてやる。そして知らしめろ。破壊とは何かを啓蒙するがいい」
ローラが呪文を唱えた。

そして怪物が闘技場の上空に現れた。

(いえ。何てことはない、雷の精霊よ。邪神や霊獣の類いじゃない。けれど、これは……)

エミリアが使役する雷の精霊二十体。それを縦に並べたのよりも更に大きなもの。

精霊を手なずけるために使った魔力の桁が違うのだ。

おそらくローラとしては、こちらの技を模倣したただけなのだろう。

しかし、だからこそ才能の違いが直接現われる。

この小さな精霊がエミリアの器。

空に鎮座する王の如き精霊がローラの器。

「……征けッ！」

エミリアは自分の精霊たちに命じ、飛翔させた。

高圧電流をまとった体当たり。

ドラゴンだろうがグリフォンだろうが黒焦げにしてしまうものだったが……しかし吸収されてし

まった。

空の精霊はますます大きくなる。

「斬れ」

ローラは自由落下しながら、ポツリと呟いた。

すると巨大な精霊は、その形状を変化させた。

右手から稲妻が伸びて、剣が出現したのだ。

人を斬るための大きさではない。ドラゴンを……否、城ですら一撃のもと両断してしまうだろう。

(死、ぬ……！)

それが自分に振り下ろされるといふ恐怖に耐えられず、エミリアは目を閉じてしゃがみ込んでし

まった。

闘志を砕かれた。

つまり既に負けている。魔法使いとして終わった。

次は命が終わる――。

※

あの敗北から一週間が経った。

エミリアはこうして五体満足で生きている。

あれから何が起きたのか、エミリアは見えていない。
途中で失神したからだ。

他の教師から聞いたところによると、稲妻の剣がエミリアに激突する瞬間、ローラの手によって防衛結界が作られ、エミリアを守ったという。

生徒に負けた上に、生徒に助けられた。

言ってみれば、一つの試合で二回負けたのだ。

(何よ、それ。想定していた最悪より最悪だわ。どの面下げて生徒の前に立てばいいのよ……いいえ、もう冒険者として、魔法使いとして表を歩けない。何が全身全霊をもってして超天才を迎え撃つよ。圧倒されて、守られた。軽くあしらわれた……いつそ誰か私を殺してよ！)

自殺する勇気が湧いてこないのが惨めさに拍車をかけた。

どうすることもできず、エミリアは次の日から学校を休み、アパートメントの自室にこもって頭から布団を被っている。

いい歳をして引きこもり。

九歳の女の子に負けて涙を流す二十三歳。

生きている価値がないほど惨めだ。

そうと分かっているのに涙が止まらない。

悔しい。悔しくて身を引き千切りたい。

戦ってよく分かった。

ローラ・エドモンズは挑むとか戦うとか、そういった対象ではないのだ。

生物としての格が違う。

放つておいても勝手に強くなる。

現に試合中に成長し続けていたではないか。

そうだと理解したのに、エミリアは割り切れない。

(悔しい……悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい！)

血が出るほど唇を噛み締めた。

子供のように嗚咽した。

そんな毎日を過ごして七日目。

呼び鈴が鳴って、少女の声が聞こえてくる。

「あの、先生……大丈夫ですか？ 皆、待ってます。だから……」

エミリアを生き地獄に落とした、ローラの声だ。

心底こちらを心配している声だ。

悪意なんて少しもない。

なのにエミリアはちっとも嬉しくなかった。

むしろ怒鳴り散らさないように枕を噛み締めて耐えるのがやっと。

(帰って、お願い、帰って！)

思いが通じたのか、ローラはそれ以上何も言わず、そして足音が遠ざかっていく。

よかった。

今は誰にも会いたくない。

しかし、じゃあいつになったら部屋から出ることができるのだろう。

明日？ 明後日？ 来週？

自分はまだ立ち上がれないかもしれない。

努力してきたのだ。頑張ったのだ。強くなったと思っていたのだ。

それが全て錯覚で、しかもローラはどんどん強くなっていく。追いつくどころか差は開いていく

のだ。

(馬鹿馬鹿しい。もういい。私はもう何もしない)

エミリアの自己嫌悪は最大級に膨らんだ。

そのタイミングを狙い澄ましたかのように、二人目の来訪者が現れた。

「開けなさい、エミリア。あなたいつまで仕事をサボるつもりなの？」

この声は。ああ、聞き間違えようもない。

なにせ命の恩人なのだから。

「大……賢者様……！」

「またそんな呼び方して。今は一緒に働いているんだから、学長と呼びなさい、学長と」

カチャリ、と音が鳴った。

玄関の鍵が開いたのだ。

物理的な鍵と魔法による二重の施錠を施していたのに、どちらも容易く突破されてしまった。扉が開いて、白銀色の髪の女性が入ってきた。

見た目の年齢は二十歳前後。エミリアよりも若く見える。

しかし実際には、三百年近い時を生きる伝説の存在。

麗しき大賢者の異名を持ち、百三十年前に魔神の一体を倒してこの国を救った英雄。

王立ギルドレア冒険者学園の創設者であり、今でも学長を務める最強の魔法使い。

カルロツテ・ギルドレア。

そんな神の如き人が、このアパートメントにやってきたのだ。

「学長……申し訳ありません、今は誰にも会いたくないです」

「そんな子供みたいなこと言って。ほら、顔を見せなさい」

エミリアが布団の中に隠れたのに、大賢者はそれを引き剥がしてしまふ。

嫌がるエミリアを無理矢理起こして、そして、抱きしめてくれた。

「見てたわよ、ローラちゃんとの戦い。あなた強くなったのね。最初に出会ったときは、ゴブリンを見て泣いてるだけの女の子だったのに。いいえ、三年前にドラゴンを倒したときよりも強くなった。偉い偉い」

大賢者はエミリアをまるで子供扱いする。

いや、子供以下だ。

言い訳はできない。子供に負けたのだから。

「何が偉いんですか……あんな無様な負け方をして、しかも相手に助けられて、生き恥を晒している……知っていますよ。学長だって本当は私を笑っているんでしょ？」

「そうね。弟子の成長を喜んで笑っているわ。本物の天才を前にしてよく逃げずに挑んだわね。あの戦いを見て、あなたをバカにする者なんて誰もいないのよ。だって、次にローラちゃんに挑むのは自分だなんて威勢のいいことを言っていた人たちは、結局、誰も挑んでいないもの。ちゃんと戦ったのはあなただけ」

「だけど、負けました……」

「ええ、そうね。むしろよかつたじゃないの。次はあなたが挑戦者。不意打ちも持久戦も心理戦も、何をやっても許される。綺麗に戦わなくてもいい。鍛えて鍛えて鍛え抜いて、またいつか戦えばいいじゃない。それとも諦める？ まあ、あなたの自由だけど。教師として働いているんだから、いつまでもサボられたら困るわ」

「……教師？ 生徒より弱い教師って必要あるんですか？ 私はあの子に何を教えたらいんですか？」

「卑屈ねえ。負けたせいで、自分が無能の極みだって思い込んでる。別に敗北が初めてってわけでもないくせに。あのねエミリア。ローラちゃんは試合が始まった時点では、あなたよりも弱かったのよ？ 気付いてた？」

「え……」

あの怪物が、自分より弱かった？

「ローラちゃんはあなたの技を見て、次々と盗んで、信じがたい速度で成長した。しかも私の目論見通り、魔法を楽しくそうに使っていた。それはエミリアの戦い方が楽しいからよ。ど派手な落雷を使って、数多くの召喚獣を使って、そのくせ基礎がしっかりしている。だから大丈夫。あの子に教えてあげられることはまだまだあるわ。そして更に引き出しを増やさない。あなた自身が発展途上よ。だって悔しかったんでしょ？ 強くなりたいんでしょ？ なら、まだ先に進めるわ。十分休んだんだから、そろそろ立ちなさい」

大賢者は今、『目論見通り』と恐ろしいことをさらりと言った。

エミリアがローラに嫉妬することも、戦いを挑むことも、どちらも読んでいたのだろうか。

しかし、エミリアにとって重要なのはそこではない。

「けれど……私は十五歳でギルドレア冒険者学園に入って、ずっと努力してきました。八年も研鑽を積んだんです。それをローラさんは数日で……いえ、あの試合中の数十秒で越えてしまいました。それでも私は追いつけるのでしょうか？」

「八年ですって？ 笑わせてくれるわね。私からしたら、数十秒も八年もさほど変わらないわよ、卵の殻もとれていないヒヨコさん。ヨチヨチ歩きができるようになったばかりなのに、一人前みたいな顔して自分の限界を決めるなんて滑稽ね。分かっているはずよ。あなた、本当は今すぐベッドから飛び出して、がむしゃらに特訓したいんでしょ？ 伸びるかどうかなんて考えず。小難しいことを考えていないで、外に出て暴れなさい。なんなら、相手してあげましょか？ スッキリするわよ」

大賢者はエミリアを見つめて微笑む。

全部お見通しという顔だ。

その目で見つめられると、何だか深刻ぶっていたのがアホらしくなってきた。

最初から深刻な問題なんてなかったような気になってくる。

「……分かりました。お願いします。私、大賢者様に八つ当たりさせていただきます」

「結構。じゃあ場所を変えましょう。あとエミリア。パジャマを脱いでシャワーを浴びてください。いくらなんでも汗臭いわよ」

「うっ」

エミリアは顔が熱くなる。

なにせふて腐れて、ろくにご飯も食べず着替えもしないという生活を送っていた。

冷静になった今考えると、二十三歳の女のやることじゃない。

「ところで大賢者様……じゃなかった学長」

「なあに？」

「学長は負けたことってあるんですか？」

「あら。そんなのあるわけないじゃない。だって私、天才だもの」

※

王都から少し離れた山でエミリアは、あらん限りの魔力と技を大賢者にぶつけては返り討ちに会い、回復魔法で復活させられ、またボコられ、気絶させられ、水をぶっかけられ、それでもなお向かっていって、徹夜で暴れて、そして久しぶりに学校に向かった。

魔法学科一年の教室を開けるのが緊張する。

生徒に負けた教師を、皆はどう迎えてくれるのだろうか。

いや、まずは一週間以上も休んだことを謝らないと。

「すうう……ふう」

深呼吸をしてから、意を決して扉を開ける。

「みんな、おはよう」

できるだけ、前と同じように声を出して教壇きょうだんの前に立つ。

すると生徒たちの視線が一斉に集まり、そして駆け寄ってきた。

「エミリア先生！ おはようございます！」

「先生、こないだの試合凄かったですよ！ 俺、感激しました！」

「先生ってやっぱり色んな技を使えるんですね。私、早く教えて欲しいです！」

意外なほど歓迎された。

訳が分からずエミリアは啞然あぜんとしてしまう。

「えっと……まずは先に謝らせて。今まで休んでごめんなさい」

授業は他の先生たちが進めてくれたから、さほど遅れていないはずだが……そういう問題ではな

いのだ。

入学してすぐの大切な時期に、担任が正当な理由もなしに一週間以上も休んだ。非難されて然るべき。

「いいんですよ。だって、あんな凄い試合を見せてくれたんですから。疲れて休むのは当然ですよ。先生、今度俺らとも戦ってください！」

だというのに、生徒たちは目をキラキラさせて、むしろ賞賛してくる。

「えっと……そんなに凄かった……?」

「そりゃもう！ 強くなったら、自分もあんな戦い方ができるんだって……想像するだけで楽しいですよ」

「だよな。今まで強くなったらどうなるか、イメージが漠然としていたけど。おかげで目標ができました。ありがとうございます」

確かにエミリアは、全力を出した。

戦術に非の打ち所はなかった。

その上で負けた。

「先生、エミリア先生！」

生徒の壁をかき分けて、幼い少女が前に出た。

エミリアを完膚無きまでに倒した、ローラ・エドモンズだ。

「私、あの試合、楽しかったです！ 魔法を使うのが、楽しかったです！」

ローラは小さな体を背伸びさせ、大きな瞳でエミリアを見上げ、一生懸命に訴えてくる。

「楽しかった？ 本当に？ あんなに剣を好きなあなたが……?」

「剣は剣が好きです。けれど……ようやく分かりました。どうしてシャーロットさんや先生や皆が魔法を一生懸命やってるのか。私、もっと魔法を知りたいです。先生と戦っていると、自分がどんどん強くなっていくのが分かりました」

「そして、あなたは勝った。本当に強かったわ」

「はい……けど、私はもう一度、先生と戦っても勝てるんでしょうか？ 先生にできる魔法って、あれで全部じゃないですよね？」

「まあ、ね」

技を出し切る前に負けてしまったのだ。

「やっぱりエミリア先生は凄いです！ これからもよろしくお願いします！」

ローラはべこりと頭を下げた。

こちらを憐れんで気を使っているのではなく、本当に教えるを請うているのだ。

ああ、とエミリアの肩から力が抜ける。

結局のところ、自分が一番子供だった。

そして、今から更に子供っぽいことを言う。

笑うなら、笑え。

「……ローラさん。次は負けませんからね」

するとローラは、今日一番の笑顔で答えた。

「私も負けませんよ！」

エミリアはその眩しい笑みを見ながら、『こうしてローラが魔法を好きになることまで大賢者は読んでいたのだろうか』と考え、空恐ろしい気持ちになった。

第四章 学園生活をエンジョイです

戦士学科も魔法学科も、やる気のある生徒は放課後にそれぞれの訓練場に向かい、自主練を行う。

また、二つの学科の生徒が共同で訓練を行うことも珍しくない。

魔法を使える戦士。

接近戦ができる魔法使い。

引き出しは多ければ多いほど冒険者として重宝される。

無論、得意分野をひたすら極めるといふ選択も間違いいではない。

ようは強くなればいいのだ。

そして今、戦士学科の訓練場の中央で、二人の少女が激しく剣戟を練り広げていた。

一人は赤い髪。何を考えているのか分らない無機質な表情で、体つきは華奢。その儂げな気配とは裏腹に、手にした剣は巨大極まる。まるで鉄塊だ。

そんな大剣をしっかりと握りしめ、赤毛の少女は容赦のない斬撃を放つ。

対峙しているのは更に小柄な女の子だった。十歳にも満たないであろう幼い少女だが、両手持ちの剣を持ち、果敢に斬り合っている。

彼女の持つ剣は身長に対してかなり大きめだ。しかし相手が持つ大剣が常識外れすぎて、さほど